

令和6年度第3学期終業式式辞

おはようございます。3月1日に穎明館高等学校の卒業式が盛大に行われ、38期卒業生がそれぞれの進路に巣立っていきました。1年生から5年生までの皆さんは、学年末をどういう気持ちで迎えていますか。こういう節目の日に自分の立てた目標に対してどうだったか、これからどうしていくべきか、を考えることは大切です。私からは昨年4月、年度の始まりの日に「穎明館生よ、教養人たれ」と、次のように呼びかけました。覚えていますか。

「穎明館生よ、教養人たれ」——皆さんはどうすればいいのか。それは、自らの知的好奇心を妥協なく追求し、本当の学力を身につけ、人間力を磨く努力を続けることだと思います。まずは全ての授業に集中して臨み、放課後の活動にも積極的に参加する。とことん熱中してみてください。そして自分の好きな学びや強みとなる分野を生み出す。皆さんならばきっとできる。令和6年度のスタートに当たり、お互いに誓いを立てようではありませんか。

どうでしょうか。お互いの誓い通りに「教養」を深められたでしょうか。そこで今日は、改めて「教養」について考える、そしてもう一度、「穎明館生よ、教養人たれ」と呼びかける機会にしたい。まずはギリシア哲学者、桑子敏雄先生の著書、『何のための「教養」か』（ちくまプリマー新書）のまえがきの一節を読み上げます。

人生は、あるときには順風のなかであり、あるときは逆風のなかにある。順風のときに目立たなくても、いざというときに頼りになる力を「底力」と呼ぶならば、教養で大切なのは、その底力である。深く思慮をめぐらし、困難を乗り越えることを可能にする人間の知的能力をわたしたちは、「思慮深さ」と呼ぶ。すぐれた選択をする思慮深さこそ教養の底力である。

「教養は幸運な時には飾りであるが、不運のなかにあっては命綱となる」ということばは古代ギリシアの哲学者のことばであるから、およそ二千年以上も昔の教えである。当然のことだが、わたしたちの生きる二十一世紀では、「幸運や不運」の意味は、古代と同じではない。現代を生きるわたしたちはそれぞれ別の人生を生きているが、一人ひとりの人生は、同時に現代の地域や国家社会や地球環境のなかにある。みなさんが行う選択が一人ひとり別々の人生のなかでの選択であっても、一つひとつの選択は、地域社会や国家、地球環境のさまざまな制約を受ける。だから、わたしたちは、そういった制約についてしっかりとした認識をもたなければ、自分の選択をすぐれたものにはできない。

穎明館生の皆さん、どうでしょうか。「すぐれた選択をする思慮深さこそ教養の底力である」などと言われると、教養ある人間でありたいと思いますよね。皆さんのイメージする教養は「飾り」、それとも「命綱」どちらですか。

語源をたどれば、「リベラルアーツ」が「教養」と訳されますが、「リベラル（自由）」にアーツ（技）、すなわち「自由になる技」が教養となります。自由になるには偏見や思い込みから解放されることも必要です。自由を求める教養ある人が、よりよい選択をすることができるのならば、「飾り」ではなく、少々、オーバーな表現であっても「命綱」としての教養を持ちたいと、私は思います。桑子先生は「命綱」のことを「人間としての根、根っこ」とも言い換えています。人生の順風にあるとき、教養は幹や枝を育て、花を咲かせ、実をつけさせる。逆風にあるときは、教養がその困難に打ち克つ力になって、その人を守る。人生は選択の連続です。中学・高校生の皆さんにとっては、進路選択こそ最重要課題でしょう。まったく迷いなく選択できた人はほとんどいないと思います。当然のことです。自分の人生を大切にしようという思いがそうさせているのです。慎重かつ、思慮深くあってください。一方で、大胆に挑戦する気持ちも大事にしてほしいものです。

教養を身につけるために勧めたいことは、いつも繰り返し申し上げてきている通り読書。読書をして先人の知恵に学ぶことです。短い人生経験で正しい判断をするには、多くの先人の知恵を学んで、それを判断材料にすることが大切です。インターネットで検索すれば、ほしい情報はすぐに得られる現代。それでも一人の人間が悩み、迷いながらどう選択したのかを知るには、ネット検索だけでは不十分です。書物になった古典を読み、時にページをめくる手をとめながら、あれこれと思考をめぐらしてみてください。試行錯誤のなかで皆さんが、生きている時代や社会のさまざまな制約についての認識を深めつつ、確かな選択や決断の根拠を得ていくことを期待しています。

ところで3年生、4年生、5年生の皆さん、3学期は1月に東京大学工学部長、加藤泰浩先生の「みんなで未来を拓いていこう」の講演を聞きましたね。大いに刺激を受けたようで何よりです。あの場で皆さんから本質を突くような多くの質問が出てきたことも嬉しく思いました。ただ大学受験に関係がある、なし等で判断せず、「本気で学ぼう。自分に生かそう」という生徒が増えてきているように思います。皆さんのためのキャリアガイダンス、講演会等々について、これからもしっかりと聞く姿勢をもって、講演者に気持ちよくお話していただく、穎明館生の知的な態度、教養を重んじる雰囲気大切にしていきたいと思います。

私はというと、加藤先生のお言葉を借りるならば、「無茶苦茶」面白かった。ご自身の人生を正直に、若い世代のためにさらけ出す。教養とは、やはりお人柄の面も大きいのだなと感じました。講演の後、加藤先生とお話ししました。「人生は偶然や人との出会いによって支えられている。また人の悪口を言わないことも大事。人生はどこでどう道が続いていくか

はわからない。恨みや泣き言よりも前に前に進むことが大切です。それを伝えたかった。」
——次から次へと人を勇気づける言葉、宝のような言葉を発し、若い世代に伝えたい気持ちで一杯の加藤先生の様子に、専門家としてはもちろん、教養人としての風格を私は感じていました。見習いたいものです。

さて、1年生、2年生の皆さん、「教養人」と言われて、少しはイメージできるようになりましたか。教養は人間関係、友人関係からも磨かれます。友人関係はお互いに尊重し合い、理解し合うことで築かれます。人は知らず知らずに、自分が考えていることが正しくて、相手が間違っていると一方的に決めつけてしまうところがあります。友人関係をよくするためには、「一人ひとりが大切な存在であることを忘れない」ことです。皆が心地よく過ごせる学級、学年、学校を目指して、友人関係を大切にしていってください。

最後に穎明館生皆さんへ。本校創立者、堀越克明先生は教養について、かつて次のように語っていました。

若者の心は柔軟であってほしい。日本の現状を誇れというのではない。ものごとに柔軟に反応し、いいものはよしとする心を育てることが大切である。人情の機微を尊ぶ精神性は、細やかな自然美を持つ日本の風土によって培われた。島国根性としてさげすまれつつも、四方を海として和み合って暮らしてきた日本人は、短所は短所として、反面に長所も育ててきたのである。われら日本民族を育ててきた、日本の自然を見直そう。今や科学技術や知識に代わって、教養が重要な役目を果たす時代となりつつある。教養とは知識や学識を、ましてや学歴を指すのではない。フランスの思想家の言を借りるまでもなく、「自分について知ること」であり、「自分と自然、自分と社会との関係について自覚を持つこと」なのである。その自然と自分との関わりを無視するものに人の心はわからないし、日本人の心もわからない。いうまでもなく自分自身も知らずに終わるだろう。

繰り返します。「教養とは知識や学識を、ましてや学歴を指すのではない。フランスの思想家の言を借りるまでもなく、『自分について知ること』であり、『自分と自然、自分と社会との関係について自覚を持つこと』なのである。」

「穎明館生よ、教養人たれ」——穎明館生の皆さん、3学期、令和6年度を振り返り、自分自身を素直に見つめ直してみてください。そして4月からの新年度に向けて、誇りある穎明館生として、改めてお互いに誓いを立てようではありませんか。

以上、令和6年度第3学期終業式の式辞といたします。